



津島高等学校 タイ王国バンコク都 研修報告



1 期日

平成 29 年 8 月 1 日（火）～ 4 日（金）

2 派遣団の構成

教頭 伊藤和明、2 年 大西三愛 竹谷祐香、1 年 竹内翔吾 三宅萌絵 竹田梨香 梶原大暉 以上 7 名

3 報告内容

(1) 8 月 2 日（水）9:00～ JICA タイ事務所訪問

前日夕方、空路でバンコク入りした派遣団 7 名は、この日の午前中、バンコク市内 Exchange Tower にある JICA タイ事務所に向かった。1 階受付で担当の方（澤内様）に出迎えられエレベーターで 31 階へ。そこで鍛冶澤様から、活動内容の説明、そして、事前にお伝えした質問について、お答えいただいた。



タワー内のエレベーターに乗るときでさえ、専用のカードを渡されるなど、セキュリティが厳しい。

本校からの主な質問は次のとおり。

- ①タイにおける支援活動の内容について
- ②援助を受けた国々はどのような形で感謝を表しているのか

まず、タイには約 4 万人の日本人が住んでいるという情報から始まり、ODA（政府開発援助）の意義、次に、タイにおける支援重点分野をお話いただいた。まとめると下表のとおり。

ODAとは・・・？

政府開発援助

(Official Development Assistance)

- 1 豊かな国は貧しい国を助ける責任
- 2 開発途上国は、生活に不可欠なパートナー(食べ物、衣類、石油などの資源等)
- 3 先進国、リーダーとしての責務(テロ・紛争、環境問題等の地球上の皆で解決しなければならない問題に積極的に取り組む)

タイにおけるJICA事業の協力課題と重点分野

援助の基本方針: 戦略的パートナーシップに基づく双方の利益増進及び地域発展への貢献の推進		
重点分野	開発課題	支援分野
持続的な経済の発展と成熟する社会への対応	競争力強化のための基盤整備	日タイ双方への増益の観点から、ハード・ソフト両面のインフラ整備の支援を実施
	研究能力向上・ネットワーク強化	国際競争力の強化、中進国としての課題や地球規模課題の解決に向けた、研究能力の向上や国際共同研究を実施
	環境・気候変動対策	制度整備、モニタリング能力の向上等環境問題解決のための行政能力強化を支援
	社会保障 (高齢化対策・社会的弱者支援)	日本の知見、経験を共有しつつ高齢化対策、社会的弱者支援を実施
ASEAN域内共通課題への対応	洪水対策	防災・治水対策として洪水対策支援等を実施
ASEAN域外諸国への第三国支援	ASEAN共同体推進	開発分野、及び気候変動対策等での域内の人材育成への支援を実施
	ASEAN域外諸国への第三国支援	TICAD/イニシアティブに基づく開発課題に列し、日タイに比較優位があり、これまでの協力によるアセット活用が可能な分野への協力を実施

開発援助というと、インフラばかりが頭に浮かぶが、高齢化対策や社会的弱者支援といった社会保障の分野でのお話に興味をもった生徒が多かっただろう。高齢化が進むタイでは、介護サービスや介護保険の仕組みなど日本に学ぶべき点が多いという。一方で、障害者の多くはタイの中心から離れたところに住んでいる。障害者の方々も近所や仲間たちとの会話を楽しむために、朝夕の涼しいときに市場まで来る。市場は一種の社交場なのだ。なかには車椅子で来る人もいる。その際に、トイレにつながる通路が狭かったり、段差があったりしては不便である。それを解消するために、関係機関で話し合いがもたれているという。

また、タイに限らず日本からの援助を受けた途上国からは、例えば東日本大震災のときに日本に向けて募金や激励メッセージ、レスキュー隊の派遣等、さまざまな形でお助けいただいた、とも。それぞれの国の状況の中で最大限できる支援を、日本は受けたのではないだろうか。

最後に鍛冶澤様は、英語が話せるかどうかは大切なポイントではあるが、人間的コミュニケーション力が一番だ、と力説された。英語ができるにこしたことはないがそれだけでうまくコトが運ぶことはない。むしろ、相手の国や人の文化的背景に配慮しながら共感力をもって接する人、そして、道路建設や介護関係などの専門的知識をもって、約束を守るとか、嘘をつかない、といった信頼される人が世界で通用するのだと。高校生は英語、その他の能力が一番伸びる時期なのでいっぱい勉強してほしい、とも。

(2) 8月2日(水) 12:00～ ナコンパトム聾学校訪問

午後からの訪問先は、社会的に弱い方が通う、バンコク近郊にあるナコンパトム聾学校である。この学校では耳の不自由な幼稚園児から高校生まで約 200 人が寮生活を送っている。ここには、JICA ボランティアとして昨年 8 月に着任した佐野かおり教諭が児童生徒と同じ敷地内で生活している。佐野先生はもともと兵庫県立あわじ特別支援学校の教員で、学生時代に途上国を中心にバックパッカーとして旅していたという。その旅行で感じたことを社会人になって、実際の行動に移している、勇気と行動力あふれる先生である。

まず、佐野先生からこの学校での活動についてご説明いただいた。彼女は着任後すぐタイの聴覚障害者の実態を把握。タイの聾者の識字率が、わずか 20% (日本はほぼ 100%) であることに注目し音とことばをセットで覚えることを提案。授業担当の教員を聾者と健常者の 2 人体制にしてはどうかと校長に進言。さらに、貧しくて補聴器が買えない子供たちに何とか行き渡るようにと活動し、使用している子供の数がこの 1 年で 3 人から 84 人に増加したという。一方で、タイは今や中進国となり急激な経済発展を遂げているものの、その恩恵が全ての国民に平等に届いておらず、また障害者に対する行政の対応についても十分とは言えないのではないかと、佐野先生。



次に生徒たちに津島高校の説明をした。愛知県の位置、津島の名所、そして津島高校の紹介(部活動や三稜祭)である。また、クイズとして「日本人が月の中にイメージする動物は何?」、「桜は何月に咲くか?」なども。こうした説明は全て、佐野先生が日本語をタイ

語に通訳し、そばにいるタイ人の先生がそれを聞いて手話で生徒に伝える。かなり手間がかかる作業だ。相手をしっかり見ないとコミュニケーションがとれないので生徒たちの目は一段と輝く。そして、生徒から本校生徒への質問タイムである。「日本に洪水はあるのか?ダムは作っているのか?」など、数年前の洪水の被害の大きさを思わせる質問から、「スカートは(アニメで見ると長い)普通はもっと短いのではないか?」、「悪いことをすると先生にたたかれるか?」など、ドキッとするものもあった。

生徒との交流の時間が終わると、学校の施設を案内していただいた。広大な敷地の中に児童生徒が住む寄宿舎があった。注目したいのは、寄宿舎の隣に職業訓練所として、指輪や金属を加工できる小さな作業所があることだ。ここで訓練を受けた生徒たちは卒業した後、持ち前の集中力を生かして細かい作業に従事できるようになるのだ、と障害者の自立に向けたサポートについて、訓練士の男性が胸を張って話してくれた。

佐野先生のことば一つ一つに我々の心をつかむ力がある。それはなぜなのだろう。そう自問しながら歩いていると、空が急に暗くなり、雨季特有のスコールに 15 分ほど見舞われた。しかし、我々 7 人は誰も傘をさすものはいない。今までのあちこちに付いた偏見というゴミを洗い流すかのようだ。そのスコールの後、心にさわやかな風が吹き抜けていった。

(3) 8月3日(木) 9:00～ ワットスッターラム高等学校訪問

午前の訪問先は、ワットスッターラム高校 (Watsuttharam School) である。Wat というのはタイ語で寺院を意味するので、Suttharam 寺院の近くにある学校ということだ。我々7人は寺院近くの駐車場で車から降り、歩いて学校に向かう。正面に大きな建物が見える。その校門らしきところから入る。するとそのとき、校内から流れる勇壮な音楽が耳に入る。50人ぐらいの生徒たちが左右に分かれて整然と並んでいるではないか。日の丸を手をしている生徒もいる。拍手が鳴りやまない。奥からは校長先生が歩み寄ってくる。全校を挙げての歓迎だ。国賓級の待遇だ。我々7人全員の首に、ランのレイ(花輪)が掛けられる。



建物の中に入るとすぐ、王族への敬意を表すしきたりがある。我々も指示に従って、床にひれ伏し頭をつけるようにして敬意を表す。国賓としての対応が求められているのだ。なお、ナコンパトム聾学校では先生も児童生徒も喪に服すために黒い服を着ていたが、ここスッターラム高校でも先生方は黒い服である。



次に、隣のミーティングルームに案内される。ここでスッターラム高校と本校の学校紹介を行った。本校からは生徒一人一人が、学校の歴史、学校行事、津島の名所など、それぞれ2分程度の英語で紹介した。



プレゼンが終わり、前に出されたココナツのジュースと団子を口にしていると、ホールから「準備ができた」との知らせが来る。歓迎パーティのようだ。舞台の横断幕には Welcome Tsushima High School の文字が。校長先生の

挨拶の後にはここの生徒たちによる伝統舞踊が披露される。なかには大人っぽく感じる生徒もいる。

式典の後は、授業見学。本校生徒にムエタイの参加型授業をしてくれるという。最初に現地の生徒たちによる模範演技を見せてもらい、「型」を会得する。その後、本校生徒たちは THAIBOXING と書かれたムエタイ用のボクサーパンツを(男女を問わず)履く。さらにボクシンググローブを着ける。サンドバッグにキックを入れたり、ペアが持つパンチングミットにパンチを打ったりした。現地の生徒から歓声があがるほど、パチーンという音が響き渡るときもあった。



「動」の授業の後は「静」である。タイの「ゴザ作り」の授業である。日本のゴザは若草色のものが多いが、ここタイでは、色がカラフルである。中学生の授業の一環として行われているようで、先生の説明に従って中学生が見本を見せてくれ、その中学生が本校生徒の左右について編み方を教えてくれた。



授業参加が終わると、もう一度ホールに通された。別れの時間が近づいてきた。わずか2時間半であったが密度の濃い時間であった。校長先生から訪問記念の楯を手渡されお礼を述べると、ウェルカムパーティで踊った生徒たちが再度登場し、フェアウェルパーティが始まった。今度はアップテンポの音楽で「ようこそタイへ、ようこそスッターラム高校へ。また会える日を楽しみに。笑顔で会いましょう」というような意味だろう。笑顔が絶えない踊りであったが、本校生徒には感極まって涙ぐむ生徒もいた。



帰り際にも、全校を挙げて見送っていただいた。これだけのおもてなしをしていただくには、横断幕の準備、学校紹介プレゼンの作成、ムエタイやゴザ作りの体験に向けた生徒への指導、踊りの衣装準備等、かなりの時間や手間をかけていただいたにちがいない。我々は、日本に帰っても、そのことを忘れてはいけない。



**We would like to build
stronger Ties with Thailand!**

もっと強い(カタイ)絆でつながりタイ!

(4) 8月3日(木) 15:00～ JETRO バンコク事務所訪問

今回の研修最後の訪問先は、JETRO バンコク事務所である。その事務所は、宿泊ホテル（バンコクセンターホテル）からほど近いところの Nantawan Building の1階にある。JETRO とは、Japan External Trade Organization の略で、独立行政法人 日本貿易振興機構のことである。8月2日に訪問した JICA（所管は外務省）とは国際協力の切り口が異なる。JETRO は、日本企業の海外進出、そして海外企業の日本進出における窓口で、所管は経済産業省である。

さて、この事務所訪問は、愛知県庁の政策企画局国際課からご紹介いただいたことで実現したものである。ご説明は鈴木様、そして今泉様をお願いした。今泉様は愛知県出身の女性で現在、タマサート大学の学生で、この JETRO でインターンシップ中であるという。ご説明の内容は、主にタイの概況についてであった。



具体的には・・・

①タイの一般情報

人口は日本の約半分 6500 万人。これはアセアンの中では、インドネシア、フィリピン、ベトナムに次いで4番目。仏教徒が 95%。一人当たり GDP は 6000 ドル弱で日本の約 15%。(GDP が 5000 ドルを超えると中進国となる)

②タイの経済情報

タイ経済の特徴として、第一次産業（農業・漁業）の就業者の割合が 33% と高いが、一方で、第一次産業の GDP シェアは 8% と低く、非効率な経済構造であるという。このため第一次産業の就業者の割合を減らし、付加価値の高い製造業やサービス業の就業者の割合を高めることが急務だという。ここは意見が分かれるところだろう。教育の問題もからめて、バンコク市内に経済が集中している状況を変えることも必要だと思われる。

タイの輸出主要国と輸入主要国は、一つの国に偏って依存していないことが特徴である。米国、日本、中国、マレーシア、韓国、台湾など適度に分散しておりリスク管理としては優秀とのこと。雇用情勢については、一日の最低賃金が 360 バーツ（約 1300 円）に引き上げがあったとのこと。

③タイへの投資状況

日本企業の進出は約 4500 社で 6 年前に比べて約 680 社増えている。味の素、トヨタ、ホンダ、東レ、伊勢丹、イオンといった古くからある大企業から、最近ではサービス業や中小企業も多くなってきている。一方で、撤退する企業もあるとのこと。

本校からの質問として2つ。

Q1 日本企業が撤退する理由はどんなものがあるか。

A1 需要がなくなったことが大きい。また、日本食飲店がかなり進出してきて飽和状態になったことや人件費が高くなったことによる。

Q2 ここ数日滞在するだけでも、タイの渋滞は予想以上であった。オートバイが車の横を通り過ぎていく場面もよく見る。狭い道路を普通自動車でするのではなく日本のように軽自動車を利用すれば、渋滞は多少緩和されるのではないか。

A2 タイの人たちは、自家用車で通勤していることが自分のステイタスだと感じている。地下鉄を使用するとなると下位層と見なされてしまいプライドが許さない。ましてや、エアコンがなくタイヤもすり減っているバスを利用することはあり得ないと思っている。タイの人は渋滞を苦にすることはないので、そこに軽自動車となると中途半端となり、買う人はいないと思う。



バンコク中心部にある伊勢丹。売場が、日本人向け、親日の現地人向けに彩られている。



このように、タイでは階級格差や地域格差が残っていて、全ての国民の幸福度を上げるという意味での発展は、なかなか難しそうである。しかし、メコン地域の中心に位置し、周辺国と陸路での国際貿易が可能であるという「地政学的な優位性」、設備の整った工業団地や大規模な空港・港湾、そして安定した電力供給といった「整備されたインフラ」、何よりも「親日的な国民性」こうしたタイの魅力を生かしていけたらと思わずにいられなかった。